

# 国経研だより

神奈川大学 国際経営研究所

〒259-1293 平塚市土屋 2946

神奈川大学湘南ひらつかキャンパス

TEL 0463-59-4111 (内線 2200)

## 「国際経営研究所」の役割を考える

海老澤 栄一

E. モランが、2003年2月日本で『越境する文化』の時代を迎えた地球」という題で講演をされた。主旨は地域固有の文化が越境して画一化が浸透していることへの警鐘であった。本来、文化は独自性を発揮しながら異種と交配することによって混沌を創りだし、精神の高揚や発想の豊かさを促す作用がある、という主旨のようにも受け取れた。

地域に限らず地方や地区、ローカル、田舎などの響きには、都会と比較されどちらかという、時代の流れから取り残されたイメージがある。しかし厳密に議論していくと、誰が何のために設定した概念なのかがよく分らなくなることがある。土屋とか平塚という地域に自分の生活基盤を限定し、どちらかという閉鎖された社会での生き方を指向することは、ステレオタイプでいう、いわゆる“田舎”にありがちな光景である。

一方、土地の区切りは人間の人為的な勝手な都合で論理的に設定された区切りなので、その区切りはあくまでも相対的な概念にしか過ぎない、という考え方もある。前者が閉鎖指向であるのに対して、後者は開放指向である。地球全体が高速の通信網や交通網で覆われ、論理的には物理的なハンディを意識せずに地球のどこからでも情報やモノ、カネが流通する

時代をむかえている。

本来地球はグローブなので、境界は存在していない。大気圏では気流に乗って、ばい煙やスモッグですらも地球的規模でめまぐるしく地球をめぐるそして時には滞留している。海流も同様である。童謡で歌われた椰子の実はポリネシアの島から日本の浜に流れ着いた。現在では、高知市のスナック名の入った100円ライターがミッドウエーの浜辺にたどり着く。地域がまさしく地球的規模で作用しあっていることを物語っている。

国際経営の“国際”はまさしく、論理的な概念であり、成田や横浜、神戸などのポートに限定される必然性はまったく存在していない。やや誇張的にいえば、土屋⇒平塚⇒湘南地区⇒神奈川⇒関東⇒本州⇒日本⇒太平洋圏⇒アジア圏・・・地球、という生命圏(biosphere)で考えれば、個性のある地域がそれぞれ連携し合いながら、グローブという広域地域圏を形成していることになる。

今こそ地域から国際を眺め、国際から地域を眺め、相互作用や相互影響のもつ意味を考える時期にきているのではないだろうか。幸い照屋所長を初め、有能なスタッフが運営に携わっている。文字どおり国際を経営の対象にする時期が到来している。「隗より初めよ」を合言葉にしてみたい。

(経営学部長/えびさわ・えいいち)

## 『国際経営フォーラム』No.15の概要

国際経営研究所の機関誌『国際経営フォーラム』（年1回発行）のNo.15/2004（2004/6/1）が発行されました。当初予定より校正・編集に時間を費やし、印刷・製本が遅くなりました。掲載原稿ご執筆の先生方を始め、関係者各位にご迷惑をかけました。

同誌は、特集/地域の時代とビジネス革新をメインテーマとし、掲載原稿18件で全240頁の仕上がりとなっています。No.14/2003に比べて約40頁の増頁となります。掲載原稿のジャンルは、特集、共同研究、研究論文、市民講座、研究ノートおよび教育ノートの6種で、当研究所の多様な研究活動の成果を取りまとめたものとなっています。

特集は、2003年3月10日に開催された国際経営フォーラムでの報告とディスカッションの概要を、誌上採録したものです。教育ノートには、本学経営学部の取り組んできた初期教育の特色とその成果について、海老澤栄一経営学部長に取りまとめたいただき、ご寄稿をお願いしました。

## 『ティーチングスタッフによる国際経営用語解説』の出版

国際経営研究所では、この度、『ティーチングスタッフによる国際経営用語解説』を編集・出版しました。経営学部で学ぶ学生・院生諸君において、多様な国際経営の領域について、授業やゼミナール等で効率的に学習し、また、その成果をレポート・論文などとして報告するに当たって、学習の手引きとして有効に利用されることを企図して編集されたものです。

本書には、経営および会計を中心に全部で348の重要な用語が収録されています。その多くは、経営学部の1~2年次の段階で学習する際に必要な基礎的・専門的用語です。用語の表記や配列を整え、用語の索引・執筆担当を付し、さらに各用語に関連用語を示すなど、利用上の便宜を図っています。

当研究所では、今後、収録用語以外の領域についての基本用語を追加・補充することにより、さらに総合的で内容の充実した国際経営に関する用語解説書にしたいと考えています。

## 「無在庫」にご用心

松浦春樹

生産活動を中心にモノと情報の流れのかわりについて研究してきた。このテーマにたどり着いたのは、博士後期課程に入ってからであるので、テーマを見つけるまでそれなりに苦労したと思っている。この種のアプローチは、今流行のサプライチェーン・マネジメントの一側面として脚光を浴びつつある。

研究の過程で、筆者は「無在庫」との言葉を聞くと、「本当にそうなのか」との疑念を持つ習いとなっている。原体験から述べよう。

狭い意味のトヨタ生産方式である。カンバン方式でモノを流す。基本的に減った分を補充する方法なので、在庫は当然もつ。

院生のころその主旨で

OR学会にて発表した。と

ころが当時も(30余年前)、

トヨタ方式イコール「無

在庫」の大合唱の最中であつた。神奈川大学ならぬ K 大学 K 工学科の有名な先生から、研究発表の内容に関してトヨタ方式イコール「無在庫」の立場からその場でご批判をいただいた。君の研究は在庫を前提としているが、トヨタ方式では在庫はもたないのではと。もちろん反論したが多勢に無勢、心の中で「それでも地球は回る」と叫んだものだ。

ところで「クロスドッキング」という方式をご存知だろうか。たとえば「商品がベンダーによって倉庫に配達されて積み下ろしされた後、すぐに物流センターに商品に配送するトラックに積み込まれます。つまり、クロスドッキングが行われる場所は、商品を在庫する機能を持たない仕分けと転

送するための施設です」

(<http://www.i2j.co.jp/>) と説明される。

筆者の感覚では、在庫することなくこのようなことを行うのは至難の業である。この疑問は氷解した。ものの本によると、たまには10・15時間分の「在庫」をもつとある。それならば可能である。

在庫の性格が違うが、トヨタ方式で運用している「無在庫」な工場に部品を供給するサプライヤーの中には、納入先工場との完全な同期化を避けるために、意図的な在庫をもつ場合も少なくないと聞く。

ここで、「在庫」の意味を検討しよう。倉庫にしまうものが在庫で、そうでない仕掛色が強いものは「在庫」と呼んでいない可

能性がある。クロスド

ッキングの場合はこれ

に当たる。また、少量

の在庫のことを「無在

庫」と表現している可能性もあろう。それならば言葉の定義の違いである。しかしながら、本気で「無在庫」と思い込んでいる節もある。筆者は、実のところ後者の場合も多いのではと考えている。

「無在庫」の表現に限らず、どうもビジネスに従事するかたがたの中に、また少なからぬ研究者の中には、センセーショナルな表現を鵜呑みにする向きがあるようである。ものごとのしくみを真に理解してセンセーショナルな表現に惑わされないように心がけている次第である。講義やゼミを通じてこれをわかってもらえたらと常日頃思っている。

(所員/まつうら・はるき)

## 研究余滴

### 研究所プロジェクトの推進

今年度の共同研究プロジェクトは、6つの共同研究が実施され、また、2つの成果報告取りまとめの作業が進行しています。いずれのプロジェクトとも、研究計画に従い、組織的・効率的に実施されていることと思います。前期の多忙な日常から少しは開放される夏季休暇は、研究所に係る共同研究プロジェクトの本格的な遂行のためのよい機会となります。

特に国内・国外での調査研究を計画されている研究チームやそのスタッフにあっては、早めに具体的な実施予定を設計して、研究の準備や予算執行の手続きをされることをお願いいたします。また、プロジェクトのリーダーにあっては、研究スタッフの効率的な研究遂行と予算の適正な執行に、ご尽力を頂きたいと思っております。

### 奨励研究プロジェクトの研究会運営

「神奈川大学共同研究奨励」制度に基づく共同研究（後藤伸主査「コーポレート・ガバナンスと経営革新」）は、このほど2年間の研究予算が3,750千円と決定されました。同研究会（略称「CG研究会」）では、去る6月16日に第1回の研究会を開催し、今年度の研究会の日程や活動予定について、次のとおり決定しました。

〈研究会の予定〉

- |     |       |            |            |
|-----|-------|------------|------------|
| 第2回 | 7/14  | 9:20~10:50 | 海老澤報告・石積報告 |
| 第3回 | 10/13 | 9:20~10:50 | 三村報告・関口報告  |
| 第4回 | 11/10 | 9:20~10:50 | 後藤報告・照屋報告  |
| 第5回 | 12/8  | 9:20~10:50 | 資料分析・中間報告  |

なお、1年目の成果は中間報告書としてとりまとめる予定となっています。

### 人事往来

去る6月30日に開催された第4回研究所常任委員会で、原田仁文氏を客員研究員として採用することが承認されました。同氏は、本学大学院の博士後期課程を修了し、2004年3月に博士（経営学）の学位を取得いたしました。

原田氏の客員研究員の正式な採用は、来る7月14日（水）に予定している第2回所員会議の承認を得る必要があります。任期は、2004年10月1日～2006年3月31日となります。

### 組織運営

〈常任委員会〉

- |     |          |  |
|-----|----------|--|
| 第1回 | 4月7日（水）  | ①2003年度活動報告<br>②2004年度常任委員の役割分担<br>③2004年度事業計画<br>④2004年度収支予算    |
| 第2回 | 4月21日（水） | 研究プロジェクトの予算配分  |
| 第3回 | 5月26日（水） | ①『国際経営フォーラム』発行<br>②研究所の出版広報事業<br>③共同研究奨励の予算交付決定<br>④講演会・フォーラムの予定 |
| 第4回 | 6月30日（水） | ①客員研究員の採用<br>②「国経研だより」No.2の編集<br>③『成果報告書』の発行形態                   |

〈所員会議〉

- |     |          |   |
|-----|----------|---|
| 第1回 | 4月14日（水） | ①2003年度活動報告および本年度事業計画<br>②研究所予算の執行<br>③『国際経営フォーラム』No.15の発行<br>④『用語解説』の出版・配布 |
|-----|----------|---|